

よりよい論文を生み出すための 著者・査読者・編集者の協働

*Our journal greatly relies on collaboration of authors,
peer-reviewers and journal editors*

田中 高政¹

Takamasa TANAKA

キーワード：著者、査読、編集者

Key words : authorship, peer review, editor

1. はじめに

学術論文が執筆され雑誌に掲載されるまでのプロセスにおいて、1) 著者（研究者）の倫理、2) 共著者（共同研究者）の倫理、3) 査読の倫理、4) 編集の倫理、5) 出版の倫理等の倫理的な課題が存在していると思われる。例えば著者（研究者）の倫理については、ねつ造（Fabrication）、改ざん（Falsification）、盗用（Plagiarism）などの不正行為（Misconduct）があげられる。重複発表（同じ論文をいくつもの学会で発表したり、違う雑誌に投稿したりすること）や、断片的発表（ひとつの研究を視点や論点を変えて、いくつもの学会で発表したり、違う雑誌に投稿したりすること）等もミスコンダクトであり、これらを未然に防止するのは倫理教育の徹底である（p.27）¹とされている。看護研究においては、ICNの「看護研究のための倫理指針」²や日本看護協会の「看護研究における倫理指針」³等で、研究者（著者）としての倫理的な行動規範が明確に示されている。このように研究者（著者）の倫理についての関心は高まってきていると思われるが、その一方で共著者や査読者、編集者や出版者の倫理、著者が論文を投稿し出版に至る「プロセス」における倫理については、あまり議論されていないように思われる。

2. 共著者の倫理

稲岡⁴は、論文に記載する著者名は、研究のテーマから研究計画の立案、データ収集、研究・考察、そして論文のまとめに至る研究過程の全般に参加していた、いわゆる共同で研究に取り組んだ共同研究者であるべきであり、一時的に協力した者や助言・指導した者は謝辞で記載すればよい、と述べている。また、ICN²は、著者として名前が記載された者は研究プロジェクトを熟知し、研究中に下された決定の正当性を擁護できなくてはならないとし、日本看護協会³は、論文の筆頭者はその論文の知見に責任があり、その研究を実施し論文を作成した人であり、研究者の氏名として記載するのは原則として研究に携わった人であるとしている。著者（共著者）であるということ（いわゆるオーサーシップ）とは、1) その論文の概念構築、研究デザイン作製、データ収集、データ分析、データ解釈に実質的な貢献をし、2) 論文を執筆し、より質の高い論文になるように批判的に修正し、3) その論文を公表することについて最終の決定をした人である^{5,6}。ところが現実には、実質的に論文作成に関与していない人に対してお世話になったお礼として（gift authorship）、あるいは例えば職場の上司をゲストとして

1 佐久大学看護学部 School of Nursing, Saku University

共著者に加える場合 (guest authorship) や、逆に実質的な研究をした人が著者のリストに載らないような場合 (ghost authorship) はないだろうか (p.154)^{7, 8}。日本人は、「和」を尊ぶ国民性を持っている (p.47)⁹。礼や面子や和を大切にす文化において、論文に関わった人を全て共著者にしてあげたいと思う気持ちは、相手に気をつかう日本的な価値観であるのかもしれない。しかし、その論文に関与している人は論文に対する責任があり、誰がオーサーシップかを明確にする事は、より倫理的であると考えられる。

3. 査読の倫理

研究において研究実施者の倫理と並んで重要なのは、研究成果の発表をチェックする論文査読者の倫理である¹⁰。日本看護倫理学会論文査読ガイドライン¹¹では、査読の存在理由は編集者と著者を助けることであるとして、

- ・ 秘密厳守で査読し、いかなる形であってもその査読論文の内容を用いてはいけなく、また自己の目的でそれを利用しない。
- ・ 査読者は権威主義的ではなく、同僚として査読する。
- ・ 倫理的な理由から査読を担当すべきでないか、または査読が不可能である場合には、査読を引き受けない。
- ・ 有益な査読となるように、著者を手助けする気持ちで査読する。
- ・ 査読者が論評するのは原稿そのものであり、著者の考え方や信条までも批評しない。

等を示し、匿名主義かつダブル・ブラインドを原則としている。

しかし、本学会のように学会員数がまだ少ない場合には、著者及び査読者の範囲は極めて限定的であり、匿名かつダブル・ブラインドの原則に則った査読システムであっても、著者や査読者が誰であるかのおよその見当がついてしまう可能性がある。すなわち、匿名は必ずしも倫理的配慮であるとは言えない¹²。日本看護倫理学会第4回年次大会の「よりよい論文を生み出すための著者・査読者・編集者間の協働」と題した交流集会で、前田樹海氏はオープン査読の可能性について述べた。前田氏の提案するオープン査読とは、査読者が誰であるかを著者に知らせる (オープンにする) ことであり、査読者も著者を知り、著者が査読者を選択できるシステムでもある。会場からも「査読者の名前がオープンになる

と、査読者がより責任を持って査読する」「感情的な査読が無くなる」「査読者は誤字脱字まで責任を持つようになる」等、前田氏の提案を肯定・支持する発言が多くあった。British Medical Journalは、1999年から査読者を著者にオープンにする試みを開始している¹³。氏名は公開するがやりとりは編集者を介する方法で、これまでのところ大きな問題は起きていないが、オープン査読にすると若い査読者は権威のある著者の査読を怖がるかもしれないし、採用決定の比率を上げてしまう可能性もある (p.339)¹⁴。交流集会の会場からも「オープン査読で名前が出るのであれば、査読者よりも共著者になるほうが業績になる」「著者が査読者を選べるようになると、“やさしい人だから” という理由で査読者が選ばれる可能性がある」等の発言があった。オープン査読の実施には、まだいくつか検討の余地がありそうだが、今後議論していく意義はあると思われる。

また上記の交流集会では、大久保功子氏が査読を受けた経験および査読をした経験について述べた。会場からは「査読者は共著者よりも論文にコミットし、ボランティアに多大な時間を要するので、査読が業績になるようなシステムがあれば査読者の努力が報われる」という意見や、「査読を受けてリジェクトされたが、そのやりとりが乱暴で恐怖を覚えた経験がある」という発言があった。また「査読者は査読のための研修を受けているのか」という質問があった。査読の力量は、その研究分野における研究者としての経験や、各自が研究を通して積み重ねてきた実力である。しかし、査読を改善する方法のひとつは査読者をトレーニングすることであり (p.344)¹⁴、特に若い研究者が査読の依頼を受けた際に、査読のためのトレーニングを受ける機会がもしあれば、受けたいと思う人はいるのではないだろうか。

査読プロセスにおいては、他にも疑問に思うことがある。学術雑誌は「原著論文」に重きを置く現状があるが、査読で「原著論文のレベルではない」とされた場合の「原著論文のレベル」が査読者によって様々である。原著論文とは何かについて著者、査読者、編集者で共通の理解があり、「原著論文のレベル」を区分する基準が明確になっている必要があるが、果たして原著とは何だろうか？ また「科学的でない」という理由で不採用になる論文があるが、著者の主張する理論の検証可能性がなければ「科学的ではない」と言えるのだろうか？

編集者は、査読者のコメントを基に論文の採否を

判断する。その査読が、クリアで、客観的で、建設的で、タイムリーで、査読ガイドラインに則っていると、編集者はとても助けられる¹⁵。素晴らしい査読によって、原石の論文も宝石になる。著者の論文をより良くするための査読の倫理について、考えて行く必要がある。

4. 編集の倫理

編集者は門番 (gatekeepers) であると言われていたが、むしろ新しい論文を社会に送る助産師であり、学問的な記録を守る人 (guardians) でもある (Preface)⁷。編集者は論文を集めて出版するだけの単なる事務屋ではなく、質の高い論文を世の中に送り出す職人であり、その責任を担うプロ集団である。投稿された原稿を倫理的に取り扱い、効率よく処理することは、著者・編集者・出版社三者の責任であり (p.251)¹⁶、よりよい論文を作っていくための著者 (共著者)、査読者、編集者間の協働の倫理について、議論を深める必要がある。

看護倫理は臨床の場にある。現場の倫理的苦悩がダイレクトに届くような、日本看護倫理学会誌の編集が期待されている。

引用文献

1. 日本学術会議. 学術と社会常置委員会報告 科学におけるミスコンダクトの現状と対策 科学者コミュニティの自律に向けて [インターネット] 2005. [検索日2011年9月24日]. Available from: <http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-19-t1031-8.pdf>
2. ICN. 看護研究のための倫理指針. [インターネット] 2003. [検索日2011年9月24日]. Available from: [http://www.nurse.or.jp/nursing/international/icn/definition/data/guiding.pdf#search='icn看護研究 倫理指針'](http://www.nurse.or.jp/nursing/international/icn/definition/data/guiding.pdf#search='icn%20看護研究%20倫理指針')
3. 日本看護協会. 看護研究における倫理指針. [インターネット] 2004. [検索日2011年9月24日]. Available from: [http://www.nurse.or.jp/nursing/international/icn/definition/data/guiding.pdf#search='日本看護協会 看護研究 倫理指針'](http://www.nurse.or.jp/nursing/international/icn/definition/data/guiding.pdf#search='日本看護協会%20看護研究%20倫理指針')
4. 稲岡文昭. 研究発表・論文公表時の倫理的配慮と研究者の倫理. 看護研究 2001, 34 (2) : 35-40.
5. International Committee of MEDICAL JOURNAL EDITORS. Uniform requirements for manuscripts submitted to Biomedical Journals: Ethical considerations in the conduct and reporting of research: Authorship and contributorship. [Internet] 2011. [Cited 2011 Sep 24] Available from: http://www.icmje.org/ethical_1author.html
6. Council of Science Editors. CSE's white paper on promoting integrity in scientific journal publications. [Internet] 2011. [Cited 2011 Sep 24] Available from: <http://www.councilscienceeditors.org/i4a/pages/index.cfm?pageid=3355>
7. Hames I. Peer review and manuscript Management in scientific journals. Guidelines for good practice. MA. USA: Blackwell; 2007.
8. Albert T, Wager E. How to handle authorship disputes: a guide for new researchers. The COPEReport [Internet] 2003: 32-34. [Cited 2011 Sep 24] Available from: <http://www.publicationethics.org/files/u2/2003pdf12.pdf>
9. 小西恵美子編. 看護倫理 よい看護・よい看護師への道しるべ. 東京: 南江堂; 2007.
10. Davis AJ, 小西恵美子, 江藤裕之. 論文査読の倫理: 査読者、著者、編集者の権利と義務. Quality Nursing 2002; 8 (1) : 49-56.
11. 日本看護倫理学会編集委員会. 日本看護倫理学会誌の査読について. 2009.
12. 前田樹海. 匿名は倫理的配慮か. 日本看護倫理学会誌2011; 3 (1) : 74-75.
13. Smith R. Opening up BMJ peer review. BMJ 1999; 318: 4-5.
14. Godlee F, Jefferson T. Peer Review in Health Sciences. Second edition. London: BMJ Publishing Group; 2003.
15. Gallagher A. The good reviewer? Nursing Ethics 2010; 17 (3) : 283-284.
16. アメリカ心理学会 (APA). 2010/前田樹海, 江藤裕之, 田中健彦 2011: APA論文作成マニュアル (第2版), 東京, 医学書院.